

深め、再構成し、2年間の終わりには長期実践研究報告として報告書を刊行し、実践研究交流集会（ラウンドテーブル）で報告する。本項では、一人の院生の報告書に見られる実習の実際を紹介したい。

取り上げるのは、福井県小浜市立西津小学校に勤務しながら福井大学教職大学院に在籍して執筆された勝見浩文による「授業観転換のプロセス：わかる授業から子どもの学びに沿う授業へ」である。執筆時、本教師は40歳代の男性で教職歴は23年であった。本実践報告は、これまでの教職歴の振り返り、自分自身の授業のあり方の見直しと再構築、研究主任として校内授業研究体制の再編成のプロセスが記載されている。そこでこの報告を、教師としてのアイデンティティの再構成、学校づくりと同僚性の再構築、重層的省察による実践の編み直しという3つの点から読み解き、実習の実際を示したい。

（1）教師としてのアイデンティティの再構成

①「わかる」ことを第一に：反省的な捉え直し

これまでの教職経験について勝見教諭は「子どもから驚きや感嘆の声を引きだそうと必死であった」「行事や学級活動は、できるだけ子どもの出番が増えるように」「体験活動が子どもたちを団結させ成長させる」と振り返る。しかし教諭は今になって思うと「子どもが『わかる』ことを第一に考えてきた」「教師がひたすらしゃべり黒板に書いたことを生徒たちはひたすら写す作業をしていた」「子どもが何を学んだかという視点を当時は持っておらず」と記述する。子どもの思いを大切に、活動を通じた成長を図ってきたことが読み取れるが、書き進める中で、当時の自分の子どもの見方を「わかる」ことを第一にしていたと反省的に捉え直している。

②「子どもの学び」に目を向けて：失敗と挑戦

「子どもの学び」に目を向けて授業研究を試み始めるが、勝見教諭は自分の授業を「教師が組み立てた流れの中に、子どもを当てはめようとする指導であった。今の自分の授業では、通用しない。わかる授業もできていない。変わらなくてはならないことに気づかせてくれた授業であった」と反省する。校内での授業研究会で「1つの理想とする授業が見えてきた感じがした」とヒントを得て「授業への関心が自分の中でこれまでになく高まっていた」と情熱を持ち、挑戦した研究授業では「子どもの意識の流れに沿った課題を提示し、話し合う授業では、子どもは活発に活動し、話し合っていた」。当初うまくいかない状況を自分の問題として真摯に受けとめ、同僚からも学び、改めて理想の授業を見出し、自身の授業改善を試みていった。

③「子どもの学び」の自分なりの理解

授業改善を続ける中、自分の授業で「この場面では、子どもの意識の流れに沿って、授業を進めることができたと思う。それは、想定外の連続であった」と手応えを得る。同時に講演や本からも学び、「自分が考える子どもの学びに沿う授業とは、授業者が子どもの意識の流れを大切にしたい授業展開をすることで、子どもが課題について主体的に調べ、考え、意見を交換し合い、考えを深めたり新しいことを発見したりする」と自分なりに理解していく。かつての自分を「絶えず上から目線で子どものことをとらえ・・・（略）・・・教員がどう教えるか、その結果、子どもは内容を理解できたか考えていた」と記述し「授業

は子どもが学ぶ場所であるから、授業について検討するときは、その時間に子どもがどんなことを学んだか、それによってどう変化（成長）したかに注目すべきであるのは当然であろう」と授業研究の在り方を論じている。

教職歴を重ね多くの校務を負う中でさほど苦勞なく授業を進められるからこそ、再度自分の授業や子どもの見方に揺さぶりをかけ見つめ直して反省し、もう一度子どもに向き合って校内での授業研究を進めていく。長期実践報告を通してこうした教師としてのありようの自覚とアイデンティティの再構成がなされていた。

（２）学校づくりと同僚性の構築

①実践の展開

勝見教諭は、どの前任校でも「分かる授業」と同僚教師への相談を心がけてきた教諭である。西津小では、研究主任就任と大学院への入学が契機となって、指導中心の授業から分かる授業へ、そして「子どもの学びに沿う授業へ」へ転換がなされていく。

西津小では、9人の教員のうち2番目に若い研究主任であった。どの教諭も時間の余裕がない。指導案等の検討を昼休み等に行う。授業を構想し指導する楽しさは感じるが、研究授業が終わると元の指導書片手の授業に戻ってしまう。職員研修会であまり意見がでない。小グループでの話し合いを教頭に相談して導入。闊達な意見交換が実現する。自身の実践の行き詰まり。大学院での他校との交流や実践の講読、スタッフの意見が転機を生む（「分かる」じゅぎょうから自ら「学ぶ」授業へ。同僚の授業を参観することが強い刺激となり、全員が公開授業を行う組織へ。組織された研究推進委員会が実践をリード（「コミュニティ・オブ・プラクティス」）。夏休みに記録を残す。

これまでの「確かな読みをもとにした表現力の育成（国語の研究）」に加えて「人権教育の指定校」となり、2つの研究テーマをどうするか葛藤。1学期は国語、2学期以降は人権教育へ。教職大学院スタッフの発言「学校の悪いところ、研究期間が終われば直ぐにやめるところ」「キーコンピテンシーに眼を向けると2つが繋がる」から心機一転。

②実践から読み取れること

上記ゴシック字の「子どもの学び」にそう授業研究、小グループでの検討、実践記録づくり、同僚との語り合い、2つの研究を行わなければならぬハプニングの乗り越え等が、教職大学院からの反射として機能している。学校と大学院を繋ぐ学校拠点方式・大学院の授業構造（学校での授業研究会と同型構造）・授業内容（学校の課題を意識した内容）・情報の広がり（他の実践者との交流と、優れた実践記録や理論書等の出会い）が、同僚性と学校づくりに効果を示している。反射として機能した理由は、勝見教諭の実践や学校づくりに関し、大学院の経験が異化する役割と連結する役割を果たしたからと思われる。

（３）重層的省察による実践の編み直し

①「わかる授業」に対する楽しさ・罪悪感

初任期、勝見先生は教材研究を充実させ自らの「教え込み」「暗記中心の」授業により「子どもから驚きや感嘆の声を引き出そうと」する「わかる授業」を追求していた。そして、「意外な事実」を「子どもたちが知った時に、驚いたり、感心したりする顔を見るの

が楽しくて仕方なかった」と勝見先生は振り返った。しかし、当時の実践を「今振り返ると」、勝見先生は「教師の自己満足のための授業」で「子どもにとって退屈であった」と反省した。このように、勝見先生は初任期の授業を振り返ることで、そこで生じた楽しさを自己満足や生徒に対する罪悪感という情動に変異させており、過去の実践を再評価した。この罪悪感は、現在職校で勝見先生が「指導書を見ながらの授業」を行い、一部の子どもみの授業参加、子どもの退屈感に気づいた経験からも読み取れるが、当時は「どうしてよいか分からず、授業を変えようとしなかった」。

ただし、勝見先生は初任期の総合学習の実践で、生徒主体授業や生徒との協働探究が楽しさを生起させることを実践記録の執筆により気づいていった。

②「子どもの学びに沿う授業」への挑戦

教職大学院初年度、勝見先生は他校の実践や同じ現職教員院生との語り合いを通して、「子どもの学びに沿う授業」という視点を新たに獲得し過去の実践を振り返りながら授業改革に取り組んだ。そして、国語科「やまなし」「海の命」の授業実践中、勝見先生は「コの字型」の机配置等を取り入れながら子どもの関心に沿った課題を提示し、子ども同士の話し合いを組織したことで「子どもに近づけた」感覚を得た。逆に、一問一答に終始した授業で勝見先生は「後悔」するようになり、次の授業で「話し合い考えを深める授業」に「挑戦してみよう」と思うようになった。このように、勝見先生は実践の振り返り、他教師との交流、子どもとの相互作用から授業の省察と再構成を繰り返していった。しかし、勝見先生は実践を振り返り記録を書く過程で「活発な話し合いがそこがあれば満足している姿」を当時の自己に見出し、学習内容に対する子どもの理解深化、探究課題への専心を促す必要性に気づいた。

③重層的省察と挑戦的課題が方向づける思考

教職大学院2年目、勝見先生は初年度の反省から「活発な話し合い」を超えるため、「サクラソウとトラマルハナバチ」の実践で子どもの意見を聴き「つないで返す」ことに挑戦した。子どもたちが活発に意見交換する場面は勝見先生にとって「想定外の連続であった」が、「子どもの意識の流れに」沿いながら即興的に授業を展開し、自らも不明な問題に「子どもと同じように戸惑」いながらも、「子どもに話し合わせながら賢明にどう授業を展開していけばよいかを考える」という“行為の中の省察”を展開していた。結果、子どもたちは互いの意見を聴きながらサクラソウの開花時期を読み取りトラマルハナバチの生存条件を理解していったという。

このように、勝見先生は長期実践報告を記述することで省察を重層化させ、「わかる授業から子どもの学びに沿う授業へ」と授業観を転換させた。そして、勝見先生は授業観転換過程に伴って初任期では生起しなかった「後悔」や生徒との協働探究が導く「楽しさ」といった情動を手がかりに即興的に授業を展開し、授業方略を絶えず編み直していった。

以上のように、教師は長期にわたる実践を書くこと、その過程で行う重層的省察により自らの専門性を創発し、その専門性が子ども理解の進展や授業方略の改善を伴い発達することで実践の編み直しを促す過程が示された。

3. 実習の効果

(1) 本教職大学院の目指す力量

21世紀の知識基盤社会に生きる力を子どもたちに育むことのできる学校教育を担う中核教員の専門的力量開発を支えることがこの教職大学院の課題である。知識基盤社会において求められる力（新しい課題に対する問題解決能力ー研究開発能力，多文化状況の中でのコミュニケーション能力，協働活動とそのコミュニティを活性化させていくマネジメントと自治の能力）を実現していくためには，学習者自身が問題に立ち向かい，協働の探究活動とコミュニケーションを深めていく学習活動の積み重ねが必要となる。こうした協働の探究活動を促し支える役割，協働探究のファシリテーター・コーディネーターとしての力をもった教員が求められる。

このことと関わって次の四つの力が連動して求められる。

①学習と成長を支えるファシリテーター・コーディネーターとしての実践力

a.知識基盤社会に生きる力を培う授業づくりの力

児童生徒が，知的な実践能力，探究しコミュニケーションし協働する力を培う学習の展開を促し支え発展させる授業を実現する力

b.児童生徒一人一人の学習の展開と成長を支える力

児童生徒の一人一人に即して，また共同関係の発展を配慮しながら，生活・学習・成長を支える力。

c.学び合い成長するコミュニティとしての学級を育む力

学習の基盤であり，一人一人の成長の基盤でもある学級のコミュニティを培い発展させていく力。

②学習の協働組織とその改革のマネジメント力

a.教師同士の協働研究を支える力・若い世代の力量形成を支える力

b.学習を支える学校組織・教師の協働研究と研修組織を改善・改革する視点と力量

c.社会的な課題と児童生徒の現状を踏まえて学校の総体としてのカリキュラムを改革する力量

③実践の質を不断に高め発展させていく省察・研究能力

a.実践を省察し再構成していくための実践研究の視点と方法

b.教育内容についての研究能力

c.児童生徒の成長に関する研究の視点と方法

④公教育としての学校を担う専門職としての教員の理念と責任

a.公教育の理念と課題にかかわる理解と研究

b.教師の専門性とその養成に関する理解と研究

c.自らの専門的実践の展開とその意義と展望について公的に表明する力

(2) 実習の実際に見られる教師の力量

本項においては，2で示した事例に上記の力量がいかに見てとれるかを示したい。

「2(1)教師としてのアイデンティティの再構成」では，子どもの学びのありように

目を向け、子どもたちの意識の流れに沿いながら、子どもが課題について主体的に調べ、考え、意見を交換し合い、考えを深めたり新しいことを発見したりする授業を目指して展開していった過程が見られる。その背後には、子ども一人一人の学習の展開と成長を支えながら学級を作っていることがうかがわれ、3（1）の①学習と成長を支えるファシリテーター・コーディネーターとしての実践力がまさに育まれているといえる。

「2（2）学校づくりと同僚性の構築」では、大学院で得た視点をもとに、学校での授業研究のあり方や組織の問題を捉え直し、研究主任として公開授業の持ち方を様々に工夫しつつ、それまでの国語の研究と指定を受けた人権教育をいかに進めるか葛藤しながら展開する過程がうかがわれる。社会的な要請と子どもたちの現状の中で、公開授業をはじめとする授業研究の編み直しを通じて学校づくりと同僚性の構築に取り組んでおり、3（1）の②学習の協働組織とその改革のマネジメント力が高められているといえる。

「2（3）重層的省察による実践の編み直し」では、教師は長期にわたる実践を書くこと、その過程で行う重層的省察により自らの専門性を創発し、その専門性が子ども理解の進展や授業方略の改善を伴い発達することで実践の編み直しを促す過程が示された。子どもの姿や授業のあり方について、実践を省察し再構成させていく実践研究の方法を修得しているといえ、3（1）の③実践の質を不断に高め発展させていく省察・研究能力が身につけられているといえる。

これらの報告では、教育のあり方や教師としての専門性について勝見教諭が問い直し、その過程を長期実践研究報告として公刊し、ラウンドテーブルをはじめとする実践研究交流集会で公的に表明しており、3（1）の④公教育としての学校を担う専門職としての教員の理念と責任にもつながっているといえる。

付記 本報告は、次の3つの学会報告を再構成したものである。

岸野麻衣・松木健一・木村 優（2011）長期にわたる実践を書くことによる教師の専門性の発達（1）教師としてのアイデンティティの再構成 日本教育心理学会第53回大会（北海道学校心理士会・北翔大学）P.521

松木健一・木村 優・岸野麻衣（2011）長期にわたる実践を書くことによる教師の専門性の発達（2）学校づくりと同僚性の構築 日本教育心理学会第53回大会（北海道学校心理士会・北翔大学）P.522

木村 優・岸野麻衣・松木健一（2011）長期にわたる実践を書くことによる教師の専門性の発達（3）重層的省察による実践の編み直し 日本教育心理学会第53回大会（北海道学校心理士会・北翔大学）P.523

文責 岸野麻衣

調査用紙

「教職大学院における学校実習のあり方と
教員に関するアンケート」

教職大学院における学校実習のあり方と教員に関するアンケート

※ 集計の都合上、セル数・セルの横幅の変更は行わないようお願いいたします。
 行の高さの変更は問題ありません。

1. 貴教職大学院における学部卒院生の学校実習(インターンシップ)にかかわって以下の質問にお答えください。

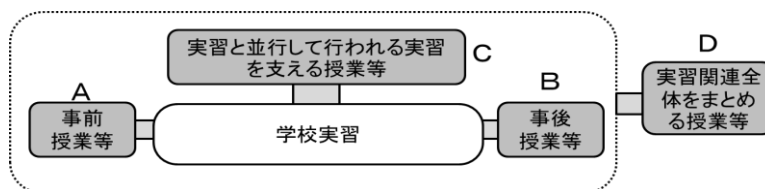
①学部卒院生の学校実習10単位の内訳と期間を御記入ください(※10単位を大まかに分けてお答えください。)

		単位数	期間(該当するところに○)		
			1ヵ月未満	数ヵ月程度	1年程度
主として担当 する学校種 での実習	一般の実習(学校等に合 わせて随時内容を決定)	単位			
	課題別実習(あらかじめ課 題を設定しての実習)	単位			
異学校種での実習		単位			
学校以外の関係機関での実習		単位			

②学部卒院生の実習を担当する大学教員についてお答えください。

	有無 (○×で回答)	実習生と会う頻度 (実習生一人あたり平均)	
		回数	全実習日数
連携協力校別の実習担当教員			
院生別の実習担当教員			
連携協力校別の担当教員と院生別の担 当教員が同じ			
実習校のメンター教諭			

③下記の図に示した学校実習を支える他の授業についてお答えください。



Aの事前授業等について該当する項目をお答えください。

- a. オリエンテーション・打ち合わせ程度が設定されている。
- b. 授業として設定されている。
- c. 特に設けていない。

回答

Bの事後授業等について該当する項目をお答えください。

- a. 報告会・討論会程度の時間が設定されている。
- b. 授業として設定されている。
- c. 特に設けていない。

回答

Cの実習と並行して行われる実習を支える授業について該当する項目をお答えください。

- a. 実習と並行してケースカンファレンスを設けているが単位としては扱っていない。
- b. 実習と並行してケースカンファレンス等の授業が設けられている。
- c. 特に設けていない。

回答

Dの実習関連全体をまとめる授業について該当する項目をお答えください。

- a. 実習をレポートにまとめさせるが、特段、授業としては行っていない。
- b. 実習の報告書作成や報告会開催を授業として行っている。
- c. 特に行っていない。

回答

④修了に際し、修士論文に代わる論文(報告書等)作成を課しているか、該当する項目をお答えください。

- a. 論文(報告書等)作成を課しており、実習内容と強く関連している。
- b. 論文(報告書等)作成を課しているが、実習と関連付けることは特に求めている。
- c. 論文(報告書等)作成を課していない。

回答

⑤貴教職大学院で行われている学校実習で、力を入れて行っている内容に◎、行っている内容に○、行っていない内容に×をつけてください。

	回答
a. 指導案づくり・教材開発	
b. 研究授業・公開授業	
c. 単元レベルの授業づくり	
d. カリキュラムの検討	
e. 学級運営	
f. 部活等の特別活動	
g. 学校行事等の特別活動	
h. 実習校における地域との活動	
i. 実習校における保護者との交流活動	
j. 子どもの生活指導	
k. 生徒指導・教育相談・気がかりな子どもの指導	
l. 学校課題について教員集団での協働研究	
k. 実習校とは異なる学校や組織での経験	
l. 実習生同士の交流や語り合いの機会	

- ⑥学部卒院生の学校実習と関連させて下記の内容を深める機会がありますか。
 機会がある場合は、どのように実習と関連付けて進められているかについて御記入ください。
 機会がない場合は、「なし」と御記入ください。

a. 教科の内容を深める授業	(例)教科領域を扱う選択科目「●●」を履修した後に、教科指導の実習科目「●●」において教科教育を実践する。
b. 学習指導要領や各種の答申等を深める授業	
c. 教育動向や公教育の課題を深める授業	
d. 実習生の学習履歴を省察し職能成長を確認する授業	
e. チーム学校や学び続ける教員集団の在り方を深める授業	

- ⑦学部卒院生の学校実習(インターンシップ)を行う上での課題があれば、記述してください。

2. 貴教職大学院における現職教員院生の学校実習(インターンシップ)にかかわって以下の質問にお答えください。

- ①現職教員院生(リーダーコース)の実習はどこで行っていますか。

	単位数
a. 勤務校で行っている	
b. 連携協力校で行っている	
c. 実習を免除している	

- ②現職教員院生(リーダーコース)の実習の内訳をお答えください(10単位を大まかに分けてお答えください。)

	単位数	期間(該当するところに○を)		
		1ヵ月未満	数ヵ月程度	1年程度
実習免除	単位			
主として担当する学校種での実習	一般の実習(学校等に合わせて随時内容を決定)	単位		
	課題別実習(あらかじめ課題を設定しての実習)	単位		
異学校種での実習	単位			
学校以外の関係機関での実習	単位			

③現職教員院生(リーダーコース)の実習に関して、「現職教員(リーダーコース)の実習を他校で行って意味があるのか」、「課題を設定して行う場合、どのように実習校内で調整が行われているのか(無理をさせていないか)」、「勤務校で行う場合、勤務時間と実習時間をどのように分けているのか」等の問題あるとの声が聞かれます。貴教職大学院では、これらの問題に対してどのように対応されていますか。

現職教員院生(リーダーコース)の他校実習について:

--

課題設定実習の調整について:

--

勤務校での勤務と実習の振り分けについて:

--

④貴教職大学院で行われている現職教員院生(リーダーコース)の学校実習で、力を入れて行っている内容に◎、行っている内容に○、行っていない内容に×をつけてください。

	回答
a. 授業研究・教育研究の組織化	
b. 生徒指導・生活指導の組織化	
c. 特別支援教育の組織化	
d. 若手教員の授業力育成支援	
e. 他校との連携	
f. 保護者支援の組織化	
g. 地域連携の組織化	

⑤現職教員院生(リーダーコース)の学校実習と関連させて下記の内容を深める機会がありますか。
 機会がある場合は、どのように実習と関連付けて進められているかについて御記入ください。
 機会がない場合は、「なし」と御記入ください。

a. 教科の内容を深める授業	(例)教科領域を扱う選択科目「●●」を履修した後に、教科指導の実習科目「●●」において教科教育を実践する。
b. 学習指導要領や各種の答申等を深める授業	
c. 教育動向や公教育の課題を深める授業	
d. 実習生の学習履歴を省察し職能成長を確認する授業	
e. チーム学校や学び続ける教員集団の在り方を深める授業	

⑥現職教員院生(リーダーコース)の学校実習(インターンシップ)を行う上での課題があれば、御記入ください。

3. 貴教職大学院と附属学校園との関係について以下の質問にお答えください。

①附属学校園は、貴教職大学院の学校実習等の連携・協力校ですか。該当する項目をお答えください。

- a. 全ての附属学校園が連携協力校である。
- b. 一部の附属学校園が連携協力校である。
- c. 連携協力校ではない。

回答

②附属学校園の教員に対し、貴教職大学院への入学がしやすいような配慮が行われていますか。

該当する項目をお答えいただくとともに、配慮がある場合、配慮内容について御記入ください。

- a. 配慮がなされている。
- b. 配慮がなされていない。

回答

(aの場合、配慮内容)

③ 附属学校園の教員が、貴教職大学院の教員スタッフとして参加していますか。該当する項目をお答えいただくとともに、参加している場合、その待遇内容について御記入ください。

- a. 参加している
- b. 参加していない

回答

(aの場合、待遇内容)

④ 貴教職大学院と附属学校園との関係で、今後取組を予定していることがありましたら御記入ください。

**4. 実習を担当する教員の質の確保も重要と考えられます。貴教職大学院における教員の採用や昇任にかかる選考基準について、以下の質問にお答えください。
(該当する項目に○をつけてください。)**

(1) 実務家教員について

ここでは、実務家教員を下記の5つに分類しました。分類ごとにお答えください。

- a. 退職教員(教員を定年退職したのちに採用された大学教員)
- b. 転職教員(教員を定年前に退職し採用された大学教員)
- c. 交流教員(都道府県教育委員会から交流人事として採用された大学教員)
- d. 併任教員(小中学校や教育委員会等と大学を併任している大学教員)
- e. その他の実務家教員(学校以外の管理マネジメント経験者・文科省等の職員)

① 貴教職大学院で採用されている上記分類の実務家教員はいますか。いる場合、「採用の有無」欄に○を付け、雇用年限や年俸制等を御記入ください。

		採用の有無	雇用年限規程有無	雇用年限	年俸制導入の有無
a	退職教員				
b	転職教員				
c	交流教員				
d	併任教員				
e	その他教員				

② 上記分類の実務家教員のうち、今後増やしていきたい実務家教員はいますか。いる場合、該当する分類の記号をとその理由を後記入ください。

③実務家教員の選考基準はありますか。該当する項目をお答えください。

- a. 選考基準がある
- b. 選考基準がない

回答

④③でa.と回答した場合、上記の分類ごとに基準が異なりますか。あるいは、修士課程と同じですか。

- イ. 選考基準が修士課程と同じ
- ロ. 選考基準が修士課程と別だが、分類毎の違いは設けていない
- ハ. 選考基準が修士課程と別でかつ分類ごとに異なる

回答

⑤④でロまたはハとお答えした場合、どのようなことを基準にしていますか。

教員分類ごとに表の中に記入してください。ただし、教員を分類していない場合、例えばaとbの区別がない場合には、a欄に記入し、b欄には「aと同じ」と記入してください。

	実務業績の内容と年限	教育実践研究の論文内容と本数	その他の基準
a 退職教員			
b 転職教員			
c 交流教員			
d 併任教員			
e その他の教員			

⑥実務家教員の勤務年数基準について下記のどの基準が適当だと思いますか。該当する項目をお答えいただくとともに、その理由について御記入ください。

- a. 勤務年数が5年以上
- b. 勤務年数が10年以上
- c. 勤務年数が15年以上
- d. 勤務年数が20年以上

回答

また、そのように考える理由があればお書きください。

--

⑦実務家教員の雇用年限は必要と考えますか。

必要とする場合、採用後の教育実践論文の執筆や、学校と大学を往還する業務をすること雇用年限を延長することができると思えることもできます。これについて該当する項目をお答えいただくとともに、その理由について御記入願います。

- a. 雇用年限は不必要
- b. 雇用年限は必要だが、雇用年限を業務等によって延長することができることに賛成
- c. 雇用年限は必要だが、雇用年限を業務等によって延長することができることに反対

回答

(理由)

--

⑧新任の実務家教員に対する採用後の研修は行っていますか。該当する項目をお答えいただくとともに、研修を行っている場合、具体的な内容について御記入ください。

- a. 研修を行っている
- b. 研修を行っていない

回答

(aの場合、具体的な内容)

--

(2)研究者教員について

①研究者教員の選考基準はありますか。

- a. 有
- b. 無

回答

②①でa.と回答した場合、選考基準は修士課程と同じですか。

- a. 修士課程と別基準
- b. 修士課程と共通基準

回答

③選考に際して、(いわゆる専門とは別に)教育実践研究の業績や実務の業績についての規定はありますか。

- a. 規定がある
- b. 規定がない

回答

④③でa.と回答した場合、規定もしくは考慮内容を簡単に御記入ください。

--

⑤③でbと回答した場合、今後選考に際しての教育実践研究業績や実務業績を規定し考慮していきたいですか。

- a. 今後、考慮したい
- b. 今後も考慮するつもりはない

回答

⑥新任の研究者教員に対する採用後の研修は行っていますか。該当する項目をお答えいただくとともに、研修を行っている場合、具体的な内容について御記入ください。

- a. 研修を行っている
- b. 研修を行っていない

回答

(aの場合、具体的な内容)

--

⑦⑥でbと回答した場合、今後研究者教員に対する採用後の研修を行う予定はありますか。

- a. 行っていきたい
- b. 行う予定はない

回答

5. 実習科目を活用した理論と実践の往還の実現に向けて、研究者教員と実務家教員が有効に機能するためには、教育課程・FD・大学間連携等が極めて重要になると考えられます。これらについてお答えください。

①実習科目において、研究者教員と実務家教員の協働による指導がされていますか。

- a. はい
- b. いいえ

回答

②理論と実践の往還を図るため、学校実習の振り返りの科目を設置していますか。

- a. ある
- b. ない

回答

③②でaと回答した場合、学校実習の振り返りの科目は、研究者教員と実務家教員の協働により実施されていますか。

- a. はい
- b. いいえ

回答

④教職大学院で開講されている科目のうち、研究者教員と実務家教員の協働による授業の割合は、おおよそ何%ぐらいですか。一番近い数値を選んでお答えください。

- a. 全授業の10%
- b. 25%
- c. 50%
- d. 75%
- e. 100%

回答

⑤理論と実践の往還を図るため、教職大学院に特化したFDの時間は用意されていますか。

- a. 用意されている
- b. 用意されていない

回答

⑥⑤でa.と回答した場合、FDの頻度は以下のうちどれくらいですか。

- a. 毎週
- b. 隔週
- c. 各月
- d. 各学期
- e. 年数回

回答

⑦⑤でa.と回答した場合、FDの内容について特出すべき点がありましたら御記入ください。

--

⑧教職大学院間で連携・協働していますか。

- a. 連携・協働はしていない
- b. 連携・協働をしている

回答

⑨⑧でa.と回答した場合、その内容をお答えください。

- a. 単位の互換
- b. 相互評価
- c. 実践発表等の交流
- d. その他

回答

⑩FDについて特出すべき点がありましたら、御記入ください。

--

6. 今後、各大学で教職大学院の拡充・拡大が進められると思いますが、どのような改革を考えておられますか。また、教職大学院全体としてどのような方向を目指すべきですか。ご意見ください。

①貴教職大学院が予定している拡充・拡大予定をお答えください(複数回答可)。

(設置を目指している大学は、設置後のことをお書きください。)

- a. 現在のところ拡充・拡大は考えていない
- b. 拡充・拡大を予定している 院生定数の増員(何名程度ですか 名程度)
- c. 管理職コース等の設置を行う(どのようなコースですか)
()
- d. 教科教育や教科専門の充実めざし、教員数を増やす(何名程度ですか)
- e. 教育委員会との連携・協働 (どのような内容ですか)
()
- f. 修士課程を廃止し、教職大学院に一本化を目指す(平成 年度頃を目標)
- g. その他()

回答

②(既に教職大学院を設置している場合)実習科目に関して改革・改善を検討していますか。

- a. はい
- b. いいえ

回答

(具体的な内容)

--

編集後記

アンケートの回収後、3月29日の本研究の報告会までの約2週間でこの報告書がつけられた。まさに突貫工事であり、あらためて読み直すと、誤字脱字が多々出てくるのではないかと不安がつる。しかし、教職大学院の学校実習に関する検討は、急を要する案件であり、この時期に何としても公表したかった。

また、年度末の慌ただしい時期に各大学に無理をお願いして、この調査ができたこと自体、各大学の関心の高さを示すものであると感じている。各大学の関心に応えられる内容であるか、いささか不安ではあるが、議論の切っ掛けになる提案はできたと判断している。

教職大学院のますますの発展のための一歩となることができれば幸いである。本調査をするにあたって文部科学省教員養成企画室のみなさんには大変お世話になった。この場をかりて感謝申し上げます。

日本教職大学院協会長 加治佐 哲也

先導的_的大学改革推進委託事業ワーキンググループ

	石川英志	(岐阜大学大学院)
	岸野麻衣	(福井大学大学院)
	木村優	(福井大学大学院)
	米田豊	(兵庫教育大学大学院)
代表	松木健一	(福井大学大学院)
	松本修	(玉川大学大学院)
	溝邊和成	(兵庫教育大学大学院)
	宮下俊也	(奈良教育大学大学院)

